

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00711

研究課題名(和文)協働的な説明活動におけるモニタリングと読解学習に関する研究

研究課題名(英文) Developing Collaborative Explanatory Activities for Improving Monitor and Comprehension Skills in JSL Reading

研究代表者

佐藤 礼子 (Sato, Reiko)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・准教授

研究者番号：30432298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本語学習者を対象としてモニタリングの働きを促すための学習法として、他者への説明が核となる読解活動を設計した。協働での説明資料作成、よい説明について言語化・精緻化する活動、相互のコメントや振り返りで得られたデータを分析した結果、学習の目標設定の明確化によってモニタリングが促進されることが確認された。また、読みの目標設定と協学により内容理解を深める活動として、複数の資料を読んで観点別に読解内容を分析、分類、グループ化する等の協働活動を実践した。学習プロセスを言語面、内容面、思考面、協学面で分析し、視覚化と概念化を促す活動を個人内と他者間の2段階で実施することが自己省察を促すと考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、協働的学習を取り入れた日本語読解学習プログラムを提案することを目的とする教授学習研究である。本研究で提案する「複数技能(読解と説明)を組み合わせ」かつ「モニタリングを促す複合的な学習活動を体験すること」は、学習プロセスの意識化と自己省察を促すことを目的としている。このような学習者自身が学びのサイクルを進めていく自己学習力を養成することは、今後の日本語教育において重要な概念となると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop the reading comprehension and explanation skills of learners of Japanese by incorporating elaboration of criteria for explanation and self-reflection. It also examined how self-monitoring of reading comprehension was facilitated. The study consisted of three main activities: collaborative creation of explanatory materials based on multiple texts on the same topic, elaborating criteria of good explanations with other learners, and mutual comments and reflections on the explanations. The data were collected from the learners' explanatory materials, oral presentations, comments, and reflections. The results showed that the learners became more aware of their metacognitive knowledge, such as their learning goals, strategies, and evaluation criteria, through the verbalization and elaboration activities. They also deepened their understanding of content concepts by analyzing, categorizing, grouping, and summarizing concepts from multiple texts.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語読解 説明 モニタリング 協学

## 1 . 研究開始当初の背景

説明する力は、コミュニケーションやプレゼンテーション能力そして書くための能力の一つとして、産出系（話す書く）の能力として考えられることが多い。しかし、本研究では、他者に説明するためには読んだ内容を再構築しなければならず、そのために自分の理解度をより意識的に評価する必要がある点に着目した。また、他者に分かるように説明するためには、相手の理解度も適切に評価する必要がある。このように、分かりやすい説明を考え、試行錯誤するプロセスが自己モニタリングを促し、モニタリングの技能を意識化させる機会になると予想した。

本研究で提案する「複数技能（読解×説明）を組み合わせ」かつ「モニタリングを促す複合的な学習活動を体験すること」は、学習プロセスの意識化と自己省察を促すことを目的としている。このような自己学習力（学習者自身が学びのサイクルを進めていく力）を養成することは、日本語教育において重要な概念となると考えた。

本研究は、協働的学習を取り入れた日本語読解学習プログラムを提案することを目的とする教授学習研究である。具体的な教授学習法として「他者への説明」を取り上げ、「学習活動が自己モニタリングに与える影響」（認知的側面の解明）と「特定の教材・スキルを対象とした教授方略の開発」（教育的意義の達成）の両面から研究を進める。

## 2 . 研究の目的

読解力は留学生が専門科目を学習するうえで欠かせない技能であり、目的に応じた高度な読み技能が求められる。このような読みにおいて重要なのが、自分の理解の状態を評価し、それに基づいて読みをコントロールする「自己モニタリング」である。本研究課題では、自己モニタリングの働きを促すための学習法として、「他者への説明」が核となる読解活動を提案する。本研究では、モニタリング技能を意識化させるうえでのスキャフォールディング（足場かけ、援助）を複数提案し、実践する計画である。これにより、理論的に裏付けられた具体的な教授方略の提案・開発を行う。このモニタリング能力は、読解に限らず第二言語学習方略一般としても重要な概念である。

具体的には、読解力と説明力を身につけるための活動の中に、「説明の評価基準の精緻化」と「取り組みの自己省察（Reflection）」を組み込む。「文章理解に関する自己モニタリング」が、「他者との関わりを通してどのように促進されたか」を明らかにする。

## 3 . 研究の方法

### 1 ) 方法 1

説明活動を取り入れた読解活動を試験的に実施し、材料と効果の測定方法の開発を行うことを目指した。実験授業において説明活動を実践し、試験的なデータ収集において、課題の種類、理解度の測定法、説明場面の分析・カテゴリー化の枠組みを確立させる。説明課題として、1 . ペア / グループでの説明資料作成、2 . 学習者の考える「よい説明」を言語化・精緻化する活動、3 . 振り返りを組み込んだ複数回の説明活動を行った。

### 2 ) 方法 2

文章理解における「他者との協働」を追究するために、複数の課題を実験的に実施し、「目的の共有の有無」と「他者との交渉とモニタリング」との関係について検証した。

### 3 ) 方法 3

初級日本語学習者へもモニタリングを促進する学習法を展開することを目指し、日本語を読み取ったり学習したりするための「ストラテジー」を学ぶコースを対象として、学習者のコメントを分析した。

## 4 . 研究成果

### 1) モニタリングのレベルを高める取り組み

研究期間前半では教育実践を通して活動の効果を検討した。モニタリングおよび自己学習力を向上させる核となるのは「取り組みへの自己省察（Reflection）」のレベルを高めることである。活動としてペアやグループでの説明資料作成、自身が考える「よい説明・よい発表」を言語化・精緻化する活動、相互のコメント・振り返りを組み合わせた。

まず、説明後のグループでのコメント活動やリフレクションシートについて、学生のコメントと教師のコメントの質の違い、教師のファシリテーションによるコメントの質の深まりについて分析を行った。学習の目標設定を言語化し、それを教師や他の学習者と精緻化する活動によ

て、メタ認知的知識への気づきが促進されることが確認された。

## 2) 読みの目標設定と協学により内容理解を深める活動

内容への概念理解をより深める活動として、複数の資料を読んで観点別に考えを整理するグループ活動の効果を検討した。上級日本語学習者を対象に、読解した資料から考えた内容を言語化し、精緻化する活動について考察した。学習者は世界の貧困問題に関するいくつかの資料の読解後に、4つの観点(原因、現状、等)が示され、4色の付箋紙に考えを書き出した。その後、各自の考え(付箋紙)を3~4人のグループに持ち寄り、内容の分析、分類、グループ化、概念をまとめる言葉や概念間の関係を示す線や矢印の書き込み、タイトルをつける作業を行い、1枚のポスターとして構成した。

事後コメントを分類した結果から、主に下記の4点の気づきが示された。

- ・日本語面：他の学習者の付箋紙から新しい語や表現を学べた。
- ・内容面：観点別に色分けされた付箋紙やほかの学習者のアイデアを見ることで、自分の考えの狭さや足りない点を振り返る機会となった。

- ・内容理解や思考の深まり：視覚化により問題の因果関係や構成要素に明示的に気づいた。

- ・他者の視点の意識化：ポスター化のプロセスで他者への伝え方やわかりやすさを考えた。

内容の分析、分類、グループ化、概念のまとめ、概念間の関係を示す線や矢印の書き込み、タイトルをつける等の作業を通して、他の学習者とのかわりから言語面、内容面、思考面、協学面での気づきや学びがあることが示された。また、読解後に視覚化と概念化を促す活動を、個人内と他者間の2段階で実施することが、明示的な自己省察を促すと考えられた。

その後、留学生の入国制限や授業のオンライン実施などされるなど日本語学習者を対象とした実証調査が困難な状況となってしまったが、上記の活動を組み合わせた学習活動を設計し、他機関の研究者と共同で実践してきた教材に取り入れ、日本語教科書を共同で作成した。

## 3) 初級学習者への展開 - 日本語学習のモニタリング -

初級や中級日本語学習者へもモニタリングを促進する学習法を展開することを目指して研究計画を見直した。学習者が自らの力で日本語を読み取り学習するための「ストラテジー」を学ぶ初級学習者対象のコースを対象として、日本語や日本語学習のモニタリングを授業で導入する方法を検討した。生活環境にあることば・文字・文を対象として、それらを学習者が自らの力で読み取るための「ストラテジー」をグループで共有し学ぶ日本語コースを共同で開発した。学習者のコメントの分析から、目標言語使用のために学習ストラテジーを学ぶことの意義、内容重視、現実の言語を用いること、学び合い、心理的安全性が確保された学習環境を評価したことが示された。初級学習者においてもメタ認知的な能力を伸ばし活用することが重要であると考えられる。

実践の基本方針は、1. 学習方法を学ぶ、2. 現実の言語を用いる、3. 内容重視で、生活環境にある短いことば・文字・文・音声を対象とした。授業は自然な短い会話の演習、日本語・文化・言語学習について話し合う演習、生教材を用いた演習で構成される。それぞれの活動後には媒介語である英語を用いた話し合いを行った。授業外で日本語に触れるためのオンライン・ディクテーション課題と授業内容や考えへの設問を答える課題があった。

学習者のコメントの分類から、目標言語使用のための学習ストラテジー、内容重視、現実の言語、学び合い、心理的安全性が得られた。受講者は、本コースの目的が言語使用のために日本語学習方法や文化を学ぶことであることを認識し(学習方法)、自然に言語を使用するためには内容を伝えたいという動機のほうが重要だと理解していることがわかった(内容重視)。短い日本語を使って速やかに返答する練習をしたことで、負担や日本語への苦手意識が軽減され自然に話せたと感じた受講者もいた(現実の言語)。クラスメートから学びがあったという認識も多くみられ(学び合い)、比較的自由に表現できる英語で話すことでリラックスした雰囲気となり語り合うことができたようだった(心理的安全性)。日本語入門期の学習者においてもメタ認知的な能力を活用し、日本語学習を進めることが可能であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐藤礼子	4. 巻 21
2. 論文標題 第二言語学習における自己調整学習を促すー日本語学習者の学びのプロセスに焦点をあててー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 第二言語としての日本語の習得研究	6. 最初と最後の頁 157-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 森田 淳子, 佐藤 礼子
2. 発表標題 日本語コース運営の改善を目的とした言語参照枠の設計と試行
3. 学会等名 日本語教育方法研究会 第57回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 奥野由紀子, 佐藤礼子, 渡部倫子
2. 発表標題 内容言語統合型学習 (CLIL) に基づいた PEACE プログラムの構築 異なる日本語レベルとテーマによる実践
3. 学会等名 International Conference on Social, linguistic and Human Mobility and Integration (EJHIB2019) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤礼子
2. 発表標題 作文からのアイデアの抽出と協働での概念視覚化の取り組み
3. 学会等名 日本CLIL教育学会 (J-CLIL) 第2回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥野由紀子, 佐藤礼子
2. 発表標題 教材におけるスキヤフォールディングと教師によるスキヤフォールディング
3. 学会等名 日本CLIL教育学会 第1回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤礼子, 山元啓史
2. 発表標題 言語・学習ストラテジを共有する入門期日本語コースの開発,
3. 学会等名 日本語教育方法研究会 第60回研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 奥野由紀子(編著), 小林明子, 佐藤礼子, 元田静, 渡部倫子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 凡人社	5. 総ページ数 120
3. 書名 日本語でPEACE CLIL実践ガイド	

1. 著者名 奥野由紀子(編著), 小林明子, 佐藤礼子, 元田静, 渡部倫子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 凡人社	5. 総ページ数 176
3. 書名 日本語×世界の課題を学ぶ 日本語でPEACE [Poverty 中上級]	

1. 著者名 奥野由紀子 , 小林 明子 , 佐藤礼子 , 元田 静 , 渡部 倫子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 凡人社	5. 総ページ数 159
3. 書名 日本語教師のためのCLIL(内容言語統合型学習)入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------